分断される世代間関係

野村雅一（のむら　まさいち）

０　「エイジレス・エイジ」の言語

情報化時代に息切れする日本語――明治維新期の漢語ブームと現在の造語ブーム

「エイジング」と「老い」

１　肉体年齢と精神年齢の落差

「大人になれない」と「老いられない」は背中合わせ

年齢と適齢期（年ごろ）の社会意識

書き割り化する社会関係

奥行き（遠近感）がなくなる

２　大衆（大量消費）社会から情報化社会へ

情報が事物を消費し、人間を分断する

男女の情報格差　cf.「妻たちの思秋期」

世代意識の分断化

夫婦の年齢差の縮小→少子化

３　社会文化的落差と平準化

「熱い社会」と「冷たい社会」（レヴィ＝ストロース）

落差のエネルギーによって発展するブルジョワ社会

都市 vs 農村、階級対立

大量消費社会という平準化

「中間文化論」（加藤秀俊）

文化的なものが社会変化の原動力として表面化する

「情報産業論」（梅棹忠夫）

４　市民社会という名の等価社会

文化的階級闘争――１９７０年代の英国パンク運動

音楽が権威を文学からうばいとり、音楽とファッションを決定的にむずびつけた

サブカルチャーがサブでなくなる

文化のファッション化

５　文化伝達の逆流現象

親が子、孫に伝える世代関係の崩壊

生活スタイルのカジュアル化という形で可視化される

その前史――ミニスカート

茶髪

６　等価社会にひろがる post festum（祭りの後）の喪失感

差異探し――内面の、分断される世代へ

７　世代隔離を越えて

きのこエスポワール病院の経験から

個人の記憶喪失と社会の記憶喪失を補い合う

終の住処（ついすみか）の現在

佐藤 浩司（さとう　こうじ）

我が国は急速に高齢化が進み、1994 年には 65 歳以上の人口割合が 14%を超える「高齢社会」に突入した。厚生省の国立社会保障・人口問題研究所の推計によると、高齢世帯の一般世帯に占める割合が 1995 年に 10%台であった東京、神奈川、千葉、埼玉、愛知、大阪も、2020 年には 30%を超える見込みである。高度成長期に地方から人口が流入し、相対的に若い世代の占める割合が多かった大都市圏では、今後は、出生率がその他地域より低いなど、少子化の傾向が強いことから、高齢者の占める割合は急速に高まることが予想される。（『終の住処（ついのすみか)』平成 9･10･11 年度「都市・住宅に関する市民意識調査」報告、都市基盤整備公団、平成１２年５月より）

０　いま住まいで起きていること

1989 年に連続幼女殺人事件をおこした犯人の部屋が公開されたとき、部屋の空間を隙間なく埋め尽くしたビデオやエロ本の山を見て人びとは納得したものです。異常な性格は外部の世界から閉ざされた異常な空間のなかではぐくまれるのだと。けれども、世の中は産業化社会から情報化社会へとシフトをつづけ、テレビや電話やインターネットが個人に直結する時代をむかえました。私たちはいま、周囲の社会と接点をもたなくても人格をはぐくむことができる環境を手にしています。おなじ住まいの住人であることが、おなじ生きがいや、おなじ価値観でむすばれていることを意味しないのです。

１　終の住処という幻想

終戦後の 1950 年には、日本人の 95.4%が自宅でうまれ、82.5%が自宅で死亡しています。ところが、1960 年には在宅分娩の割合が半分になり、1977 年には自宅で死亡する者も半数をきってしまいます。現在、９割以上の者は病院などの施設でうまれ、７割以上の者が病院で亡くなっているのです。みずからの家でうまれ、みずからの家で死ぬ。それは、現代人の抱く一種のマイホーム幻想だったのかもしれません。

２　定住と移動

家族の死は避けてとおることのできない事件です。それに直面したとき、いかにして死のもたらす危険な状態を回避するか、社会はそれぞれの仕方で回答を用意しています。

定住を余儀なくされた農耕民の社会では、死者の霊魂が地上をさまよって、のこされた人間に危害をくわえたりしないように、霊魂をしずめる葬儀をおこないます。そうして浄化された

死者の魂は、家をまもる祖霊として、ふたたび家屋のなかにむかえいれられるのです。家屋は祖先の霊魂が安全にやすらい、家族の成員が祖先とのつながりを確かめる場になります。

いっぽう狩猟採集民のあいだには、家族の誰かが死ぬと家屋を捨てる風習があります。ボルネオの狩猟採集民プナンでは、死者の遺骸をカゴにくるみ、それを家屋や森のなかに放置して集落全体が移動してしまいます。プナンには葬儀をおこなう習慣がありません。家屋のなかに超自然の領域をひきうけ、それらと折りあいをつけながら生きてゆくことをしないかわりに、プナンのとった戦略は家屋を捨てて逃げることでした。

３　住まいは何のためにあるのか？

伝統的な住まいの空間はしばしば不健康で住みにくいものでした。それは、定住を前提とする農耕民の住まいの本質が人間の生活にはなかったからです。住まいの目的は、「家族」や「社会」をまもり、世代をこえてその制度を維持してゆくことにありました。

現代人の住まいは、死んでしまった祖先をまつる場ではなく、この世に生きる人びとが快適にすごすためのものですが、その結果、ひとつ屋根の下に住まう者たちを統合してきた力もなくなりました。

現代住宅のかかえるジレンマは、その住空間の特質がじつは移動民の住まいときわめてちかいところにあるにもかかわらず、私たちの心性がいまだに定住民のそれを脱しきれていないことにあります。

４　終の住処の将来

人間は社会的な動物といわれます。人間性をはぐくむのは本能ではなく文化ですから、情報化社会のなかでもそうした人間の本質が変わることはないでしょう。けれども、いまや社会は、家や国といった空間の境界をこえてひろがっています。家族や隣人が理解できなくても仕方ないのです。それでも私たちが住まいから逃れられないのは、人間が肉体をもち、生や死をむかえるためです。

住まいのかかえる問題は、愛や共同性をつよめることでは解決しないでしょう。ひとつ屋根の下で、いかに緩やかな人間関係をきずいてゆけるかに、終の住処の将来はかかっています。